Japanese Association for Religious Studies

の間に距離がなかったわけではないが、そうしたウラマーと一般信徒の関係は、ひとつの連続体の両極という関係にあった。両者の間には地域共同体に密着した仲介者の役割を果たす者がいたのだ。そして今、新しい説教師の果たしているのはこの役割である。ハーレドたちは、新しいメディアをとおして情報を自由に取捨選択し、ネット上で自らの意見を表明するといった行動が当たり前になっている人々のために、そうした行動様式の延長線上にイスラムを据え、日々の生活とイスラムについて考え語るという行為をつないでみせる。

十九世紀末からの近代化政策は社会におけるウラマーの居場所を徐々に縮小してきた。子供の教育の担い手、地域共同体の精神的支柱という側面は後退し、イスラム諸学、とりわけイスラム法学の専門家と認識されるようになった。しかしこれをエジプト社会の「世俗化」と見るべきではない。なぜならイスラムが社会から後退することはなく、ウラマーの退場によってできた隙間は、一般の信徒によって埋められていったからである。新しい説教師たちは、こうしてウラマーが不在になっていた空間に、新しい形でイスラムをふたたび埋め込み、その意味でエジプト社会の再イスラム化を完成させたと見ることもできる。

ジュナイド神秘主義におけるファナー論

澤井　真

初期スーフィズムの代表的スーフィーの一人であるジュナイド（al-Junayd, d.910）は、神的合一（タウヒード）を論じる過程において、ファナー（fanā'）の語とその対概念であるバカー（baqā'）の語を中心に彼の神秘主義論を展開した。スーフィーのさまざまなテクニカル・タームと同様に、これらの語も共にクルアーンに由来しており、ファナーの語は「消滅」を、バカーの語は「存続」を意味している。

クルアーンにおいて「原初の契約」（mīthāq）として知られている一節（第七章一七二節）は、ジュナイドが神的合一を論じるうえで重要な役割を果たしている。この句は、創造以前にあって神がアダムの腰から子孫を取り出して、神が主であることを証言させたという内容である。「原初の契約」とは、この出来事に依拠している。

この「原初の契約」との関わりにおいて、彼は自らのファナー論を展開させた。すなわち、神は創造以前という始まりのない永遠性が消滅するとき人間の前に顕現する。このとき、人間は未だ現世的存在を有しておらず、人間は肉体としての存在でもなく、また非存在でもない中間的性格を有する者である。この状態において人間は現世的な在り方から消滅（ファナー）しているため、人間は消滅の状態において消滅し、存続の状態

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

（バカー）において存続する。

さらに、タウヒードにおけるジュナイドの議論もまた、ファナーとバカーの語を使用することで論じられている。彼は自己がタウヒードへ到る前提として、自己そのものによって神的合一が妨げられていることに言及している。彼によれば、自己の願望によってタウヒードへ到ることは骨折り作業であり、神によってもたらされるものであるという。また、選ばれた者たちだけバラー（balā）と呼ばれる苦痛を伴う試練を通してタウヒードへ向かうことができる。このバラーにおいても、彼はアイデンティティーや自己という人間の外形的形態の強調が、タウヒードの妨げとなっているとみなしている。

こうした前提に基づいて、ジュナイドはタウヒードへ到る過程としてのファナーを三つの段階から説明している。第一段階のファナーは、自己自身を取り巻く様々な属性、言い換えれば、「私」の「私」性を消し去ることである。方法としては、神によって定められたシャリーアに埋没する形で進められ、低次の自己であるナフスの統御を通して行なわれる。第二段階のファナーは、神への服従を通して得られる喜びからの消滅である。この理由は、彼が儀礼という人間と神の介在物を取り去るためである。さらに、第三段階のファナーは、神の眼差しによって自己自身が消滅することである。この段階においては、自己は名前やアイデンティティーが消滅（ファナー）し、自己ではない神のなかで存続（バカー）することになる。すなわち、自己は神のなかで消滅すると同時に、神という「一者」の存続を通じて存在する。各段階のファナーを経た自己はもはや前段階の自己とは異なっている。

ジュナイドによれば、神的合一に際して、神は「合一」において自己を不在から存在へともたらし、「分離」において自己を不在から存在へ導く。この一連の過程は、神と人間のあいだの断絶という「第一の分離」から合一の状態へと到り、再び神と分離するという「第二の分離」として知られる状態を指していると考えられる。このとき、ジュナイドの神的合一におけるファナーは、「第一の分離」以前である「原初の契約」において自己が現世的な在り方から消滅し、かつ存続していた状況を現実化し、再帰化するものであると言えよう。

仏教儀礼論の可能性
――カッシーラー、アサドを手掛かりに――

小野　真

日本の仏教儀礼が、欧米の近代儀礼論を援用して説明されることはそれほど多くない。そもそも仏教儀礼論自体が日本では低調であり、欧米において儀礼論が盛んになされていることを思えば、非常に特徴的であるように思われる。これは、欧米の儀礼論の構えがそもそも仏教儀礼を語るのにふさわしくない要素をもっているからではないであろうか。

われわれの問題意識をより明確にするため、西洋の立場からの日本仏教儀礼についての言説として、エルンスト・カッシー

NII-Electronic Library Service